とある都市の風紀委員

すけさんＸＩ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人口２３０万人の近未来都市である「学園都市」には「風紀委員（ジャッジメント）」という学生たちによる治安維持組織がある。風紀委員の中枢の役目をも担う第１支部の支部長の「播磨正吾」と彼の周りの人物の壮絶な学生生活に焦点を当てる。

※小説関連の執筆は初めてです。ですのでまだまだ未熟な所も沢山ある私ではありますが、アドバイス等ありましたら是非よろしくお願いいたします。

また、キャラ崩壊や原作との設定などの矛盾が起こるかもしれませがどうかお許しください。

目次

第１話　播磨　正吾 ―― 1
第２話　風紀委員第１支部 ―― 9
第３話　家路より ―― 18
第４話　幾何学的魔術と科学 ―― 26
第５話　動き出す歯車 ―― 36
第６話　秘密事項 ―― 48
第７話　拮抗、決着 ―― 58
第８話　気付き ―― 68
第９話　日常と水面下 ―― 77
第１０話　常識が当然とは限らない ―― 86

第1話　播磨　正吾

家の近くの緑色と桃色に包まれている桜の木に、やや強めに風が吹いている。四月の中頃と言ったところであろうか。

ある1人の学生がその桜を寝ぼけながら見つめていた。彼はまだ午前中であることを祈りつつ時計を見たが、時刻は既に一時を回っていた。少しショックを受けた様子だった。彼は残念そうな顔で再び布団の中へ殻に籠るように入っていった。

学生の名は播磨　正悟（はりま　しょうご）。高校生の彼は休日からか、情けない事に、このような時間まで寝ていたのであった。布団の中から顔だけを出し、寝ぼけながら葉桜を眺めいていたのであった。

だがある時、彼の耳元で着信音が鳴り出しのであった。携帯電話の画面には『神明』という文字が映し出されていた。播磨はこの時点でなにかを察していた。

播磨は寝床の近くにたまたまあった消費期限不明のカレーパンを食べつつ、少し焦りながら家を出る支度を始めた。そして、電話に出る。

「もしもしー。どうしたの？」

と、播磨は軽い口調で答える。

「大体分かってると思うけど、事件よ。あんたの家の学区内の八丸銀行。真っ先に向かえるのあんたぐらいだし、それに手っ取り早いからさ、至急向かってくれるかしら？」神明は非常に冷静に播磨に要件を伝えた。このようなやり取りに慣れているかのように。

「えーと、だるいから無理なんだけど。」

播磨は面倒くさいからか、嘘を付いた、というよりかは神明に難癖を付けてみた。

「そんなのもう聞きあきたし、ていうか立場わきまえてるの？いいから向かって。」

神明は冷たく彼に言いつけて、通話を終えた。

「はいはい分かりましたよー・・・。」播磨はそう小声で呟きつつ、身支度を進めていた。少し経つと彼はだらけながら自転車で八丸銀行へと向かい始めた。

ーー午後１時３２分頃事件発生。案件は銀行強盗。現場は当学区内の八丸銀行です。犯人グループは３人組の模様。

今回の事件の詳細らしい。春の季節は何故かは分からないがこのような事件が少し多い気がすると播磨はふらっと考えてみた。

「いや、そんなことないのかなー　…。」小声で呟き自転車で例の銀行へ向かいつつあった。

「全員おとなしくしてりゃあ、命は救ってやるよ。だから黙って大人しくしているんだな…

…　！」

目以外全て真っ黒に包まれている男はナイフを片手に持ちながらこう叫んだ。彼の周りでは仲間と思われる２人が銃を構えつつ見張りをしていた。銀行の窓、入口はシャッターなどで完全に閉じられていた。外には多くの野次馬などが見られた。

播磨は自転車を止め、事件現場である八丸銀行に到着した。そういえば警備員（アンチスキル）はまだ来てないのかと少しだけ考えてみた。だが、実際はそんな事どうでも良かった。彼はすぐにまた別のことを考え始めた。

ーーーなんで、この街はこんなにデリケートなんだろう?人口２３０万人。だがその

内のほとんどは学生。だからかは知らないけどこの都市は
学園都市と呼ばれている。そんな大規模な都市がなぜこんなにも荒れるのかな。

やっぱり、最先端どころか近未来なこの学園都市ではどうしても「落ちぶれ」が存在してしまうから？それとも、都市の上層部の人間や研究者達の思惑によるもので、それぞれの「将来の世界のため」と言う名の「私利私欲」なのか？もし後者だとするならば、俺は絶対それを許したくない。例え立場上関係の深い奴でも。そう。許さないんだ。あいつらは、あいつらだけは、絶対に・・・。――――――

ここで播磨はふと気がついた。

いけない。また変な事を考えていた。今はさっさとこれを終わらせて帰って「みんなでミニチュア」を見るんだ。今は１時４０分。よし、２時半の放送開始までには十分間に合うな。やはり生で見ることに意義がある、うん。だから敢えて録画はしない。

「さて、事件解決しますかね」

そう呟き、ひっそりと周りから姿を消していった。誰も彼の事に気がつかなかった。

　その2分後くらいだろうか、銀行内から大きな音がした。その瞬間、シャッターに大きな穴が開き、犯人グループの一人が店内から追い出され、道路の向かい側の街路樹のそばで気を失っている。それに気付いた犯人の一人がこう叫ぶ。

「おい誰だ!･好き勝手に暴れてる奴は!!」

　これにある男が反応する。犯人の男に向かいながらこう伝えた。

「おいおい、よくも好き勝手やってくれたなぁ。で、もう覚悟は出来たか?･」

　そう伝えた瞬間彼は犯人の目の前に移動した。だが、周りの人達には移動したようには見えはしなかった。

「じゃ、さようなら。」

　そう小声で呟き彼は犯人の男の腹に拳を打ち込む。そして男はへっぴり腰で腹を抱えながら後ろへ下がり、いつの間にか気絶した。

「お、お前ぇ、な、何もんなんだよぉ!?」

　犯人最後の一人が彼に怖気づいたように質問した。すると彼は最後の犯人にこう言う。

「ジャッジメント（風紀委員）だよ。でもよ、そこらの奴らとは違うけどな。」
それを聞いて犯人は路地へ向かって走り去っていった。
「こ、こん畜生ぅぅ!!覚えてろよ!」
犯人は道路脇に止めてあった自分達の車に乗り込もうとする。
「おっと、下手に逃げるのはやめておいた方がいいと思うぞ。」
犯人が振り返った瞬間に車が宙に浮いた。いや違う、これは落ちてくると犯人が察するまでもなく犯人の真上に車が落下していく。
「う、うわあぁぁーー!!」
ガッシャーン!という大きな音と共に犯人は車に潰されたのであった。
炎上する犯人の車の姿や後ろから巻き起こる歓声と拍手が目や耳を通じて伝わってくる。時折「ありがとー!」とかそんな感じの言葉がはっきりと聞こえて播磨は少し照れているような仕草をした。
そんな中、ある女が播磨に向かって歩いている。そして隣まで来てこう播磨に言っ

た。

「あら、お疲れ様。中々派手にやらかしてるのね。」

播磨にこう言い放ったのは先ほど播磨に電話をかけてきた神明だった。神明　華蓮（しんめい　かれん）彼女も風紀委員所属だ。

「まあただ、仕事をしただけだし・・・。どうせ上が払ってくれるさ。」

播磨は少々ふてくされながらこう返した。

「それもそうよね。まぁどうにかなるでしょう。」

神明も何だかあっさりとした感じで続けて返事をした。

「じゃあ今からは室内で頑張ってもらいましょうか。」

「え、何すんのこれから。何かあったっけ今から？」

「他の支部向けの書類の作成よ。急遽入って来たの。まぁ3時頃には終わるでしょうね。」

「何それ聞いてないんだけど・・・？」

「予定外なのは皆そうなのよ。まさかまたサボる気なのかしら？」

薄笑いをしながら普段神明が隠し持っている銃をちらちらと播磨に見せながら片手で掴んだ。

「分かってるよ行くよ！もう痛い目なんて見たくねーよ！」

少々興奮気味にこう口にした。

神明の銃は確か「Ｍ４」とかそんな名前だった気がするなとあまり関係ないことを考えながらも自転車でふらふらと風紀委員の支部へと向かった。

「播磨・・・　流石ね。『あの人』が認めただけあるわね・・・・。　私もがっかりさせないようにしっかりサポートをしないといけないわね・・・・。」

神明は心の中でそう呟き、播磨に続くように支部へと早歩きで向かったのであった。

「さて、着いた着いた。ちゃっちゃっと終わらせちゃいますかね・・・・。」

播磨は案外気楽に風紀委員の支部へと入って行った。どんな量の仕事が待ち受けているのかすら知らずに階段を淡々と上がって行くのだった。

第2話　風紀委員第1支部

「うわ、何じゃこりゃ・・・。」
播磨はコピー機の隣の机に山積みにされてある大量の書類を見て絶句した。
「新年度が始まったばかりなのにいきなりこれかよ・・・。どうかしてるぜおい。」
「新年度だからこそよ。この時期忙しいのは日本国民である以上宿命なんじゃないの？」
神明は播磨の愚痴に対して手を動かしながらこう適当に返した。まあ確かに、神明の言う通りなのかもしれない。だがそれでも不満はある。
「俺達はいつから社畜養成所の構成員になったんだ？呆れるぜ本当。」
「そんな事言う暇あったら働いたら？文句は言う癖に行動しないのは社畜じゃなくてただのニートよ。」
少々呆れ気味に神明はこう返事した。言っていることは正しいと思う。ただ少し毒舌過ぎないか？と播磨は感じていた。まぁもう慣れたのでやっぱりそこまで何ともは

思ってもいなかった。

少ししたら播磨も仕事をし始めた。どうやら他の支部へ送る書類が大量に溜まっていたらしい。期限がかなり近いからこうやって急な呼び出しが来たらしい。やれやれ、事務の人たちにはもうちょっと書類管理は頑張ってもらわないと。「学生だから～。」という言い訳はこの風紀委員では通用しないということを俺が行動で示してやろうと、さっき文句を言っていたが播磨は燃えていた。

時間は既に午後２時を回っていた。だが播磨はそんな事気にせず左手でコンビニで買ってきたバタークッキーを取りながらパソコンの画面と向き合っていた。

『……　新学期と言うこともあり、各支部付近の状況把握のために各支部毎にＡ４両面５枚のレポートを作成してもらうことにする。期限は４月中とする。　以上

第１支部』

やっと１種類終わった。播磨は大きく息を吐き出した。

「事務に出しに行くかな…。」

そう呟き席を後にした。

「コンコン」
「あ、どうぞ～。」
播磨はドアを開けた。
「あ、ごめんこれ例の書類の一部なんだけどこれでどうだろうかな？」
「確認しますね～。ちょっと待っててください。」
播磨にこう答えたのは事務室の「烏森（かすもり）」さん。薄い桃色の髪に眼鏡、そして小柄な体型だ。そして性格は温厚な方。少なくとも播磨はこの人に悪いイメージは持っていない。

だがしかし、よくよく考えたらこの事務室は皆を苦しめている書類無断遺棄事件の発生現場じゃないか。ここは支部長として一回注意を入れてやろうじゃないか。そう播磨は心の中で決心した。とりあえずその内の1人烏森さんに注意をすることにした。

「とりあえずざっと確認したんですけど、特に問題はありませんでした。引き続きお願いします。」
「ありがとう。それとこっちからも言いたい事があるんだよね。」
「はい、何ですか？」

「この書類関係の事なんだけど、これ期限近いのに急に出されて皆困ってるんだよね。何があったの？」

「あっ・・・　えっとそれは・・・。」

　烏森さんが椅子に座りながらもじもじしている。もしかして主犯はこの人なのか？と播磨は疑問を感じた。

「実は・・・　私がもう使用済みの書類だと勘違いしてて倉庫に締まったままにしてたんです。そして昨日過去の書類データを漁ってたら気付いて・・・。」

「ええ・・・。」

「すみません！私のせいで皆さんに迷惑かけてしまって！本当にすみません！」

　烏森さんが俺の前で必死に謝っている。小さい体全体で。どうやら反省はしてるみたいだな。と播磨は感じていた。

「まあまあ、そこまでいいよ。烏森さん反省してるみたいだし、ただ次からはないようにしようか。」

「以後・・・　気を付けます。」

その言葉と同時にさっきまで床を向いていた顔が上がり、播磨と目が合う。目が若干涙ぐんでいるようだ。

「ん…？」

播磨は心の中で呟く。か、可愛い…。播磨は顔をほんの少し赤くしながらそう思った。だが少しして咳払いをして播磨はこう口にして事務室を後にした。

「じゃあ、よろしくねー。」

「はい…　頑張ります…！」

烏森もこう返した。

そして自分の席に座る播磨。時計を見たところ、時間はすでに午後3時だった。だが書類は　まだ終わらない。ひたすらパソコンの画面とにらめっこをしながら、キーボードを高難度もぐら叩きのようにひたすら文字を打ち込んでは、訂正を繰り返した。

「播磨、お茶入れたから置いとくよ。」

神明の声だ。視線をパソコンから左上に移すと彼女の姿があった。

「あぁごめんわざわざ。ありがとう。」

「別に礼なんていいのよ。あなたの補佐である私の仕事だし。」
冷静に神明はこう答える。少しくらい照れたりしてもいいだろと心の中でツッコミを入れる播磨。

暗めの茶色ロングヘアーに俺の学校でもある「帝ケ崎高校」の制服。なぜ制服？まさか週末朝の定番「希望者補習」に律儀に参加しているのか？だとしたら恐ろしい奴だ。つくづく播磨は驚愕し、そして困惑した。

「この１杯、大切に飲まさせて頂きますぅ・・・。」
播磨は神明の横でお辞儀をしながらこう呟いた。
「どうしたの急に？また変な茸でも食べたの？」
神明が失笑気味にこう返した。
「怪しい茸はそもそも１回も食べたことないんですけど・・・。」

瞬時に播磨は返した。フェイクニュースを流されてたまるか。そう感じたのだろう。
「そう？ならいいんだけどね。」
そう残して神明は自分の席に戻った。

そうこうしている内にいよいよ書類作業も大詰めを迎えて来た。何かを記憶の中に置き忘れている気がするがそんな事気にしていたら仕事が終わらない。播磨は前向きになっていた。

ある時、播磨はふと自分の席の周りを見回してみた。

「やっぱりここは大きいなぁ・・・。」

そう小声で呟いた。それもそのはずであり、播磨達が所属する風紀委員第１支部は周辺の学区の管理だけでなく他の支部全ても管理する司令塔のような役割もあるからだ。そのため、他の支部よりも建物、人員の規模が大きくなってくる。

播磨はまず左の方を見回してみる。彼の正面に続く机とパソコンと人列の奥に事務室へ繋がる扉がある。右を見てもやはり机、パソコン、人の行列だが播磨の席の真横の奥の方に２階と地下へ繋がる階段。２階には学園都市全体を監視するメインモニターがある。そして地下に資料保管室。第１支部所属の人はだいたいざっと３０人くらいで前後している。年によって人数は多少変化するのだ。

「机を見たらその人はどんな人なのか、見えてくる。」

そんな事を大分前誰かに言われた気がする。まあ間違ってはいないなと自分の真正

面にある机達を見て播磨は思った。

例えば神明。自分の机の一部が銃の保管庫と化している。拳銃が２丁、短機関銃らしきものとスナイパーライフルあろう物、確か「Ｍ４」だっけ?それぞれ１丁ずつ。本人曰く、特例でセーフなのらしいがそれでも心配する。後は狐、豚、狸のソーラーなんたら。光が当たって動く奴。

では神明の隣の大須（おおす）はどうだろうか。ＰＣゲームのソフトがかなり並べられている。っていうか今ゲームをしているじゃないか。後でしばき倒してやる・・・。こいつは地味なようで実はこんな事日常茶飯事。どんな奴なのかは付き合ってみないと分からないの代表例だ。

そういえば烏森さんの机には英語の小説が結構置いてあった。あの人は外国語も出来てパソコンの使い方も一級品。ちょっと抜けてる部分があるのを除けば、かなり凄い人なんじゃないか?

「でそういえばあの人は・・・。」

播磨が心の中でこんなやり取りを繰り返す内にも時間は時計の針に合わせるように経っていくのであった。

第３話　家路より

「…　終わったぞおおお!!」

仕事が終わったという大きな喜びからか、播磨は反射的にこう叫んだ。時刻は既に午後5時となっていた。

「あぁ、やっと終わったのね。お疲れ様。」

神明が播磨に近づきながらこう話しかけた。だが今の播磨には多少の嫌味などどうでも良いのだ。

「それにしても、結構ぼうっとしてたような気がしたけど、どうかしたの?」

「いや特に何でもないんだけどな。ていうか逆にブルーライトの集中攻撃の中ずっとやれる訳ないんだけど…。」

「それもそうよね。」

支部の人達はそれぞれ会話をしながら帰れる人はそのまま帰宅、当番などで残る人は

仕事続行という流れだ。神明は週1回メインモニターの
監視が当たってしまったのでまだここにいるらしい。

「じゃあ悪いんだけど、今からもよろしく。」
「礼なんて別に大丈夫よ。当番ぐらい普通にこなすわよ。」
「それなら大丈夫だな。それじゃあお疲れ～。」
「ええ。また明日。」
この言葉で明日が月曜日である事にはっと気付かされる播磨。少々がっかりした。

『家路』これを家に帰れるという安心感などからか楽しむ人もいれば、逆に家に帰りたくない、そのような人からすれば家路は絶望の道と化すのかもしれない。自分は1人暮らしなのでどちらかといえば前者が該当するのだろうが、何か味気ないからかつい寄り道をしてしまう。もう日も沈みかけているし。どこかに寄っていこう。

「久しぶりにゲームセンターにでも行くか。」小声で播磨は呟いた。ゲームセンターと言えば格闘、レース、クレーン、メダルなど様々なジャンルがあるが播磨の推しはなんといっても音楽ゲームだった。リズムに合わせてボタンや太鼓やらに触れたり叩いたり

する。

言葉だけでは簡単に見えるのだが難易度が高くなるにつれて譜面に着いていくだけでも疲れたりするし、汗も結構かく。だがワンプレイ１００円と思えないハイクオリティさに播磨は毎回心が惹かれてしまいついついゲームセンターに寄ってしまう。そして今日も方向転換をするのであった。

自転車を駐輪場に停めると、播磨は自動ドアに若干吸い込まれていくかのように早歩きで店舗へ入っていった。店内に入ると外の雰囲気と全く異なるような煩さ、振動、煙草の匂い。通い始めた頃は違和感を覚えるだろうが、慣れてしまえばどうっていうことでは無いのだ。

店内はちょっとした迷路の用に様々なジャンルのゲームが置かれてあるが、それでも結構スッキリしている。そして播磨は体が勝手に動いているかのように、音楽ゲームが置かれてある場所へと向かっていったのであった。

音楽ゲームのコーナーへ行き播磨が毎回疑問に思うのは明らかに学園都市の条例に

より学生は本来ならば風紀委員に帰るよう指示されるはずなのだが、各ゲームの筐体が明らかに学生らしき人で結構埋まっていることだ。ここは播磨が注意すべきだが肝心の播磨自身も条例を思い切り破っているので黙殺することにした。

さて、まずはどれから始めようかと悩む播磨。最近の音楽ゲームは種類が多くユーザーの選択肢が大きく増えてしまい、この類いのゲームをよくやる人にとっては、嬉しい悩みとなっている。それにそれぞれに個性がある。ピアノや太鼓をモチーフにしたのもあれば、ドラム式洗濯機の用な風貌の物もある。あげくの果てにはダンスを使ったりする物まで。

それぞれに個性があるからこそ、企業がそのゲームの特徴を押し出し、競合し、そして新たな音楽ゲームが生まれてきたのだろう。そうした世の中の流れに感謝しながら最初にするのを決め、筐体へと再び歩き始めた。

1プレイ目。疲れからかスコアが少し伸び悩んでいた。音楽ゲームは疲労があると動きが鈍くなるというのは播磨は自然にそう感じていた。だが慌てる必要はない。播磨は自らの経験と直感から鞄から栄養ドリンクを取り出し、筐体に居ながらぷはぁと一気にそれを飲みきった。そして2プレイ目、3プレイとやって行く内に自然とスコアが伸びて行った。

様々なゲームを巡回した後、播磨はゲームセンターでの一時を終えると、気分が良いのか家で入るのが面倒なんか、銭湯へ向かう事にした。ここでも播磨の寄り道癖が出たのであった。

もう既に太陽の面影は無く、黒い空にぽつんと月が１つ君臨していた。

お金を払い、脱衣を済ませ、そしてシャワーなどを駆使して体を流すとついに湯船へと向かう。右足からまず慎重に底を探すように入れていく。床が見つかり次第左足を入れていく。そして膝をゆったりとまげて体全体を湯の中に収める。疲れをとってくれるのか否かは分からないが、とにかく今の播磨に銭湯はぴったりだったようで思わず大きくため息を出してしまった。

「おや、お疲れのようだね。」

少しすると少し白髪が多い中年くらいの人が播磨に話しかけた。髪型はＫ泉首相のようだ。それにしてもかなり穏やかそうな人だと一瞬で察知した。

「ええ。だからここに来たっていうのもあります。」

「気持ちは分かるよ。お酒が飲めなかったあの頃は食事とお風呂が数少ない癒しの１つ

だった。今はゲームとかいろいろあるけどねぇ…。」
「確かに昔と比べたら自分達はまだ恵まれてるのかもしれないですね。」

「それは人それぞれとしといて、君は何処の学校に通ってるんだい？」
「あー帝ヶ崎高校です。今年度から2年に。」
「そうなんだ。僕は君の学校の反対の学区で先生やってるだ。物理が専門なんだけどおやね。」

文系の播磨はどう足掻いても1年生の時の化学基礎、生物基礎しか分からない。なんて返したらいいのかと困惑したが、反射的にこう返した。
「物理ですかぁ…。成る程。文系だから履修これからなんでけど面白そうですよね。」

「そうやって何にでも興味を持てるのは良いことだよ。にしても帝ヶ崎は不思議だな。なんで学園都市にあるのにやけに勉学と文系を推すんだか。」
そんなこと言われても分かる訳がない。だがこの人が言うことには一理ある。同情しておこう。

「通ってる自分が言うのもあれなんですが、案外その通りかなって思います。」
　この人ならちゃんと話が出来そうだ。だいたい経験と知恵で分かる。こちらからも振ろう。「でもここには世間で言う高学歴となる大学に入ろうするため、本気で勉強をする人もたまに要るんですよね。その過程で文系の分野に興味を持ったりまたは最初からそうだったり。そういう人が集まるのが帝ヵ崎なんじゃいのかなって。そう思うんです。」

「君、将来明るいよ、きっと。そうやって客観的に見れる人はとても良いことだ。時間は大丈夫かい？」
「もちろん、いつまででもどうぞ。」
　播磨は顔を少しや柔らかくして即答した。初顔合わせの２人の間で湯船に癒されながらの討論会が始まった。湯気とシャワー、水の音が部屋を包み込んでいた。

「今日はありがとうございました。」
「いやいやこちらこそ。楽しかったよ。それしじゃあまた何処かで。」
「ええ。お会い出来たら嬉しいです。」
　２人はそれぞれ逆方向の道を進んでいった。お互いとても満足しているだろう。

自転車にぶつかってくる風に少し煽られながらも家に向かって行く。今晩は荒れるかもしれない。洗濯物を片付けなくてはと徐々に焦りが出来てくる。だがその話題は心の中であっという間に過ぎ去り、夕食をどうしようかどうしようかと考えていた。

小さな雨粒が1つハンドルに当たる。それを見て播磨はまた焦り出す。そして片側3車線の道路の隅を立ちこぎで飛ばし始めた。赤信号の先に眩しいライトが2つ見える。赤信号を確認し止まる播磨。だが向こうの車に減速気配がない。まさかと播磨は思った。交差点を越え、播磨の方へまだ直進する。

「な、嘘だろ・・・。ちょっ」

辺りに大きな衝撃音が鳴り響いた。

第４話　幾何学的魔術と科学

「だ、大丈夫ですか？」

播磨は心配そうに衝突してきた炎上してい大型車に詰め寄った。播磨に怪我はないようだ。だが、相手の車からは少し経っても誰も出てこない様子だった。車が道路の端とぶつかった地点と播磨がいたそれは少しずれていたようだった。

すると後部座席から武装している人が数人出てきて、あっという間に播磨を包囲してしまっていた。全員が銃を構えていて、銃口を播磨に向けている。

「・・・　やっぱり、そうだよな。」

播磨は呆れながらこう口にした。それに反応するように取り囲んでいる人の１人がこう警告した。

「大人しくしていろ。貴様の命はまだ救済の余地がある。」

「救済？何をそんな宗教じみた事を。ここは学園都市。科学が全てで宗教に価値は無い

んだよ。」
播磨は冷静に持論を展開。宗教を経由して彼らを煽るように。
「貴様！もう一度言ってみろ！」
さっきの人がこう大声で怒鳴った。銃口は更に播磨に近づく。
「・・・　さてと。」
「あの世とやらで先祖にこう言いな。『こんな惨めな死に様ですみませんでした。』ってな！」
最後の言葉の瞬間、播磨は自分の真正面にいた武装兵を大きく蹴りあげた。蹴り飛ばされた武装兵から短機関銃を奪い取り取り押さえて口に銃口を当てこう告げた。
「お前は第1号だ。おめでとう。」
「ひっ、そ、そんな！待ってくれ！うわあああぁ！」
悲鳴と銃声が鳴り響いた。今の播磨はさっきまでの穏やかな人ではない。気配、顔、声のトーン、態度、行動が真逆になっており狂気をふくんでいた。まるでスイッチで切り替えたかのような変わりようだった。

それを見て他の武装兵が一斉に播磨に向けて射撃を開始した。だが狙った先に播磨は居ない。

「ここだよぉ・・・。」

そう耳元で囁かれた1人が振り返る間もなく頭を何発も打ち込まれてしまった。殺意に満ちた目と声が他の者達を恐怖に陥れる。

次は3人目だと言わんばかりに標的を定める。恐怖からか、それとも絶望からか、銃声は一旦鳴りやんだ。

「ひいぃ、く、来るなぁ！」

播磨の標的が弱腰にかつ怯えながら警告した。

「中身の無い警告に、相手が従うと思うか？」

そう言いながら近づいていく。

「く、くそったれ！調子に乗るな！」

開き直ったのか今度は先程より強気だった。

そしてすぐに発砲を開始したが、やはり居ない。

「良いもんもってんじゃんかあ…　借りるぜ。」
播磨は発砲してきた武装兵が持っていた警棒を手に持っていた。その兵士にはそれを取られた覚えなど一切無かった。
「じゃあね。」
そうつげられる告げられるのに気付く間もなくさっきの警棒で倒された。

そして振り返ると残りの7人が居ない事に気付いた。そして直ぐに自分から急いで逃げている残りの武装兵の姿が見えた。
「結局こうなるのか。哀れなこった…。」
呆れぎみに敗走兵に止めを差そうとする。道端に転がっている手榴弾をいくつか見つけた。それらを手に持った。
「マジックショーの開始だ。3．2．1…　ポンっと。」

爆発秒読みの手榴弾達が播磨により空に上げられた瞬間葉っぱや石ころと入れ替わっていた。
「な、なんだこれは…。ま、まさかぁ！」
道路の真ん中で爆発が起きた。だが残念ながら1人まだ生き延びているように見え

た。

「まぁいいか。」

熱が冷めたのか追い討ちをかけるのが面倒になった。そしてその流れでさっきの車を見に行った。

「ん…　?なっ!」

播磨がフロントガラスを覗き込んだ瞬間人影と一筋の光が見えた。反射的に播磨は慌ててしゃがんだ。次の瞬間、白い糸状の棒の束がフロントガラスを突き破り真っ直ぐ斜め上に飛んで行った。

「…　噂通りで何よりだ。素晴らしいな。」

その後直ぐに車から誰か1人出てきた。

「取り囲まれてから１０人中９人を処分するのに掛かった時間は1分３４秒。流石に治安維持組織の頭なだけある。」

右目が白髪が目立つ少し長めの髪に隠されている。だが、着ている服は割りとしっかりしている。外国での正装か何かだろうか。

「敗走兵に存在価値は無い。君はそう思うかね？」
急に、唐突に播磨に語りかける。
「そんな事、考えた事は無かったな。」
「私はそんな奴には死を与えるべきだと考える。上の指示に歯向かう、生意気な犬。」
そう言い終えたとたんに男の正面にいた残り1人の武装兵を探し始めた。

「生意気な犬に、生きる理由は無い・・・・！」
男の人差し指からさっきの糸のような物の束がもの凄い速さで出てきて、あの敗走兵へ向かっていく。そして間もなく播磨には命中して殺されたように見えた。

「なっ・・・。」
こいつは味方も容赦なく殺していく奴なのか驚きを隠せない。そして瞬時に、一筋縄では倒せない事を察した。
「だが、メインディッシュは貴様なのだ。楽しませてくれよ。」
「おい待て。
「ここでやるので不味いからな。場所は指定させて貰うぞ。」
「構わんよ。貴様の好きなようにしてくれ。」

一瞬迷った後に播磨と男はとある廃工場にワープしていた。

「神明さん。」
「どうかしたの？」
「ええ。ここから案外近い所で何かあったみたいで。今から映像を出しますね。」
「ええ。よろしく。」
支部をもう少しで閉じようとしていた時の事だった。

部屋の端から端まである巨大なスクリーンの一隅に映像がタイピングの音とクリック音の後に映し出された。
「拡大出来る？」
「勿論です。」
腕を組みながらじっと拡大された映像を見つめる。

「これは・・・　。播磨が居るわね。後、最後に車から出てきた能力者の人を調べてもらえる？」
「了解です。少し待ってください。」

「・・・・　え。」
「どうかしたの？」
「映像から分析してもＩＤと顔写真が出て来ないんです。どうなってるんだ・・・？」
「・・・・。」

首を傾げながら考え事をする神明。そしてよしと呟いてこう伝えた。
「とりあえず私はあっちへ向かうから。だから何かあったらまた言ってもらえるかしら。」
「わ、分かりました！」
こうして神明は早歩きで現場へ向かって行った。

「ここで大丈夫なのかい？」
「ああ。ここなら大丈夫だな。」
播磨は男の問いに対して緊張気味にこう答えた。
「そういえば、聞きたい事がある。いいか。」
「ああ。どうぞ。」

「お前、何者なんだよ。」
播磨は男を少し睨み付けて質問をした。
「何者ぉ、ねぇ‥‥。どう答えようか。とりあえず十字教の使いである事は言っておこうか。そういえば申し訳遅れたな。『ウランゴ・コスタ』だ。後少しの命だが、よろしく。」
コスタと名乗った男は自信に満ちているかのようにこう言った。どうやら本気で播磨を殺しに掛かるようだ。

「そんな十字教が俺に何の用なんだよ。」
播磨は警戒しながらこう質問した。
「我々十字教にとってここのような科学が蔓延るような物は邪魔で仕方なくてね。まずはお前から。そういう事だなぁ‥‥。」
コスタは冷静に淡々と低い声で返した。
「最終的にはこの都市には消えて貰わないととねぇ‥‥。」
播磨は少し考えた。仮にこの都市が消滅してしまったら、大量に居る学生能力者は一体どうなるのか。とても能力者達の受け皿になる場所など今のところは存在しない。受け皿が無いまま水を注いでもこぼれるだけなのは当然の話だ。

「‥‥ それは無理だし、俺達がさせねぇよ。勝手に入り込んで来たお前達に好き勝手させると思ったら大間違いだぞ!」
「ほう‥‥。出来る物ならやってもらおうじゃないかぁ‥‥ !」
「そんな事当然だ。風紀委員の名に懸けて守って見せる。この学園都市を!」
播磨は腕章を右腕に着けた。他の支部のは違う、金色の腕章。それと同時に2人共すっと構えた。播磨の腕章とコスタのピアスと腕時計が廃工場の微かな光を反射し、少し輝いていた。

第５話　動き出す歯車

２人はしばらく構えたまま互いを警戒するように睨みつづけて続けていた。すると播磨は唐突にこう言った。

「‥‥　さぁ、来いよ。」

「あぁ。」

その言葉と同時にコスタは左手を真っ直ぐ播磨の方へ向けた。そして手の平から糸状の束のような物が播磨へ向かって猛スピードで進む。

「さっきのか‥‥　！」

播磨は特に問題なく別の場所にテレポート出来た。さっきのは地面に刺さった後に時期に消えていった。床に穴を開けていることから、威力は十分にある事を確信していた。

「どうだ。絶望したか？まあするだけするがいいさ。」

「さぁ、それはどうかな？」

播磨は少し笑みを浮かべながら返した。

「では、どんどん行かさせてもらうぞ。」
今度は手の平を真上に上げた。そしてまたさっきの糸の束が出てきて、真上に突き進んでいく。だが、さっきのよりかなり大きめだ。
「ではこれならどうだろうか?」
天井から糸の束がまた猛スピードで降りて来る。だが、束の数がさっきよりも明らかに多くなっていた。

「な、どんどん来るな。」
播磨は若干劣勢のように見える。今のところただ来た物を避けるのみ。これではきりがない。
「ふふふ‥‥。逃げるだけの戦術はいつか破綻するぞ。」
コスタは左手指をピアノの弾くように動かした。すると播磨が避けた糸の束が前とは違い再び播磨に襲い掛かって来た。
「追いかけてくるか‥‥。なかなか厄介者だな。」
能力のテレポートを使いかわし続ける播磨。だが何度でも播磨にそれは向かって来る。明確な殺意を持って。

「お前、その能力何処で手に入れたんだ？少なくともお前、学園都市の奴ではないだろ。」
　播磨はそこまで余裕の無い中問いかけた。
「ふふふ・・・・。魔術だよ。」
「魔術・・・？」
　繰り返し襲い掛かる糸の束を慌てて避けながら会話を続ける。
「とりあえず能力使いが居るのは学園都市だけでは無い。よく覚えておきな。ちなみに俺は蜘蛛の能力って所かな。」
「魔術なんて仮想の話じゃないのか・・・・！」
　播磨は今まで自分の心の中での常識、思い込みが完全に否定されてしまったからか、かなり衝撃を受けたようだ。

「ピピピピピピピピ・・・・。」
　着信音が鳴った。反射的に電話に出る。
「あの、神明さん。播磨さん達の位置がなんとか掴めました。」
「そう。ありがとう。場所はどの辺り？」
　少し焦っているのか若干早口になる。
「今神明さんが居るところから近いです。川沿いの廃工場です。」

「そこか‥‥。」
　神明は納得したかのようにこう返した。
「ごめんなさい、ちょっと急がないと行けない。」
「いえいえ。気を付けてください！」
　電話を切ってから神明は播磨のいる所へ急行した。まるで播磨が何かを待っているかのように。

　一方その頃、播磨とコスタは空中戦を展開していた。そろそろ反撃を試みたい播磨はチャンスを模索していた。そして徐々にある事に気付いて行くのであった。
「ん、そうか‥‥。」
　播磨は閃いた。例の糸の束は一回避けきると次のラッシュに若干時間を要する事に。その時間を利用を画策し始める。
「さぁどうする？もがきながら裁きを受けるか？それとも運命を大人しく受け止め来世に期待するか？」
　コスタは己の優位を確信してこう発言した。
「図に乗るなよ屑野郎っ‥‥！」

播磨は少しずつむきになっていく。苛立ちと不安と悩みがごちゃごちゃに入れ混ざって行くのを本人が感じていた。

例の束が3方向から飛んでくる。そして播磨はテレポートで難を逃れた。そして今だと彼の体が反応した。

「ここだ‥‥　！」

反撃を開始しようとした。だが下から時間差を置かずに束がまた襲い掛かる。

「なっ‥‥　！」

何とか避けるが不意を突かれてしまった。

「経験の乏しいお前の考える事なんぞ丸見え。次の波が来るまでの空き時間を利用したいんだろ？お見通しだよ。お前と俺では生きてきた土壌が違うんだよ！」

続けてコスタは手を床に置いた。

「いい加減しつこいからな。これで締めさせて貰うぞ‥‥　！」

コスタの周りの地面が糸の色で染まって行く。

「く、来る‥‥　！」

すると直ぐに今までとは比べ物にならない量の束が真っ直ぐ飛んでくる。
「ルゥーソ・ディール・インフェンロ！」
最初の方は避けきれるが、段々と追い詰められていく。
「くっそ、なんて量だ！これじゃあ……。」
「悪いな。しつこいからか、少し苛立っていたんでな。少し早いがお別れだ。」
「なっ……！」
何とか避けきれていた播磨だが、遂にコスタの攻撃を食らってしまう。
「うわっ！」
少し急所は外れたが諸に攻撃を受けた。そしてその衝撃で廃工場の端へと飛ばされ、そして壁を突き破り外へ行ってしまった。

「ここまで粘られるとはな……。噂の7人のレベル5にはもっと苦戦しそうだな……。」
こう呟きながら、少し休息を取るために煙草を用意した。ライターの火がはっきりと映えていた。灰色の煙が穴が空きがちな天井へ向けて登って行った。しばらくするとコスタは立ち上り播磨を捜しに外に向かい始めた。

「痛ったたた……。まあでも大丈夫か。」

普通の人なら間違いなく死んでいるであろう衝撃を受けた播磨だったが、不思議な事にピンピンしている。
「あら、捜してたのよ。」
聞き慣れた声。神明だ。そう確信した。
「やっぱり見られたのか。まあいいや。」
「中々苦戦してる見たいね。」
「まぁ、そうなるのかな。」
「で、どうするのよ。」
神明は播磨にこう尋ねた。
「あぁ、その事で頼みがあるんだ。」
そうして播磨は頼みを告げた。
「・・・・ 分かった。そっちはそっちで頑張ってね。」
「ああ。当然だ。確実に倒しきる。」
「ええ。」
２人はこうして別の場所へ向かい始める。
「血の匂いがぷんぷんしている・・・・。ここで一体何があったと言うのかな。」

播磨の勝利を確信し余韻に浸っている。この廃工場を少々気紛れで探索しているようだ。

「辺りを見ても廃墟しかないとは‥‥。ここは本当に学園都市の一部なのか?」

コスタは不思議そうに、そして若干の不安を覚えながらこう嘆いていた。

――――今は２１時１５分。後５分すれば奴等が帰ってくる。神明が食い止めてくれるだろうがそれでも早い内に終わらせないと。――――

「‥‥ よし!」

コスタの頭上に３つくらいの鉄骨が突然表れる。だがすかさず反応した。

「なっ‥‥ !」

慌てて片手を天井へ。すると実物よりかなり大きい蜘蛛の巣の様な物がコスタの頭上をカバーする。辺り一面に広がる大きな衝撃音と土埃。

しばらくしてコスタは叫んだ。

「くそ!一体誰だ!」

自分の周りを警戒しながら見回した。

「よお。ご無沙汰してるぜ。」
「き、貴様ぁ！まだそんな力が有るのか！」
　コスタは播磨の奇襲にかなり怒っているようだった。
「感情に身を任せる事。それがどんだけ危険な事なのか、お前が一番知っているよな？」
　播磨は煽り気味にコスタにこう言った。
「ならば確実にもう一度仕留めるのみ。行くぞ！」
　やはり糸の束がいくつも播磨に向かって猛進していく。だがコスタは何かがおかしい事に気付いた。播磨に避ける気配が全くないのだ。
「馬鹿め。とうとう完全に血迷ったのか？」
「違うさ。」
　こう返した瞬間、播磨を襲い掛かっていた糸の束が彼の体を目前に後ろに大きく逸れていってしまったのだ。まるでバリアでも張られてあるかのように。
「ど・・・・　どういう事だ!?」
　あまりの突然の事に困惑しているようだ。
「・・・・　ここの学生は特殊な演算処理をして己の能力を使用する。俺の場合は２つの物

体の座標を交換したりあるいは自分の座標を移動出来たりする。」
一歩一歩コスタに近付いて行く播磨。だがそんな彼を余所目にもう一度攻撃をしようとするコスタ。

「さ、さっきのはハッタリに違いない・・・！そうでないと・・・・そうでないとぉ！」
右手を勢いよく床に置く。やはりさっきのように自分の周りが糸の白で染まっていく。そして束が一回天井に向かい、そこから急降下。
「これで・・・・！」
コスタの耳と目をが大きく舞い上がった土埃と衝撃音が襲う。反射的に顔を隠すように腕を持ってきた。

間もなく土埃は収まった。だがそこからは人影がはっきりと見えた。
「どうなっているんだ!?」
播磨はまだコスタの方へ向かって行く。
「だが・・・・！その演算式を応用する事で能力の幅は大きく広がる。テレポートや物体交換だけじゃない。特定座標への侵入拒否に、負担は大きいが秒に何回もテレポートすることで空中も速く移動が出来る・・・・！」

「ならばこれでどうだ‥‥　！」
懲りずにまた攻撃の準備をしている。今回は中々大技のようだ。
「本人の演算能力次第で！」

急に走り出す播磨。それに慌てて構えを取るコスタ。そしてテレポートした。
「そんな‥‥　！」
播磨の蹴りがコスタの横腹に直撃する。壁に大きく叩き付けられていった。背中への衝撃は自分の後ろに蜘蛛の巣らしき物を作り難を逃れたようだが蹴りを受けた箇所は相当痛そうにしていた。

「悪いな。俺は立場上、この能力を公に出来ない。風紀委員の俺には相手の個別の理由で屑の相手してる余裕はない。」
目を閉じながら亀裂の入った壁に座り込んでいるコスタ。
「もちろんここでお前を生かすと、お前の仲間に情報が漏れるのは明らか。」
「だからよ‥‥　お前には悪いんだが‥‥。」
播磨の言葉に反応してコスタははっと目を開けた。何かを察したかのように。

「お前には此処で、死んで貰うぞ・・・・。」

播磨はコスタを若干睨み付けながらこう言った。

第６話　秘密事項

「・・・　どうやら始まったみたいね。」
　静かに息を吐き出しながら電話に出ている神明。ぐちゃぐちゃに放置され、山積みにされている建築資材の上に込んでいた。
「おかげさまであいつの所へ行けた。ありがとう。」
「いえいえ。当然の事ですので・・・・。」

「そう。・・・・　そういえばあの集団は後どれくらいで着きそうかしら？」
「今は近くの通りを走っているので・・・・。後２、３分くらいですかね。」
「あら。もうすぐじゃないの。いつもよりほんの少し早いかも。それじゃあここらへんで。お疲れ様。」
「はい。では頼みます。」
　この会話を最後に電話を切った。

「・・・・　さてと。」

また神明は静かに動き始めた。右手に持っている銃を握りしめて。

――――――レベル5はこの学園都市にはたった7人しか居ないと言われている。だけど、それは違う。違っていた。闇がこの都市の一部を隠すように、隠し隠されている。あくまでも単なる噂程度でしかない存在。『隠れレベル5（シークレットファイブ）播磨正吾』‥‥　！――――――

「‥‥　死んで貰うだと？」

播磨のあの言葉ではっと目が覚めたかのように話出した。

「あぁ、そうだ。」

「さっきまで劣勢だった奴が良くそんな事言えるな。まさか私の事を見くびっちゃいないだろうなぁ？」

少し間が開いたからなのだろうか、持ち前の冷静さを取り戻していたようだ。

「当然だし、だからこそこの力を使うんだ。確実に潰してやるよ。」

「成る程。本気で来ると‥‥。」

「そういう事になるな。」

「善きではないか……　全力と全力の衝突……。」
「くっ……。」
　コスタの発言１つ１つに播磨は警戒心を高めていく。
「そうだ。ついでに貴様に俺の魔法名を教えてやろう。」
「魔法名……　？」
「そうだ。俺のそれはｊｕｄｉｃｉｉ３９４。日本語にすると『裁き』という意味になるのかな？」
「裁きだと……　？」

「それともう１つ。この魔術名は殺し屋としての意味があってな。これを知った物にはな……。」
「……。」
「死がまっている待っているのだよ！」
「くっそ、お前も殺しに来るのか……　！」

　そう言いコスタは右足で地面を勢い良く踏みつけた。
「バリリエア・ビアンカ！」

コスタの周りがまたもや白で染まっていく。だが今回は規模も何かも違うようだ。

「うぉっ。」

播磨の足元にコスタの糸がじわじわと伸びていく。

「貴様の能力のように、俺の能力の使い道も決してワンパターンではないのだよ‥‥。」

「やっぱりそうだろうな‥‥ !」

播磨はテレポートをして糸の縛りから解き放たれた。

「今度はこっちの番だ!」

コスタを真上から殴り掛かった。だが、向こうも対策をしない訳では無かった。

「丸腰で挑むと思ったか?」

手の周りから蜘蛛の巣のような物が生成されていく。それと、播磨の拳がぶつかりあう。衝撃波が辺りを波状に包み込んだ。互いの能力がじりじりと拮抗し合う。

「ぐぬぬ‥‥ !」

つい播磨が口に出してしまう。蜘蛛の巣の装甲は相当硬くなっているようだ。そう

こうしている内にコスタがその体勢を維持しつつ別の攻撃を仕掛けてきた。いわゆる揺さぶりだ。片手の指を動かすと同時に前の束がまたもや襲い掛かる。当然のように後ろへと弾き飛ばされた。

「ならこれで‥‥　！」

播磨はテレポートをしてコスタの目線の真下へと移動をした。そこから低姿勢のまま蹴りを繰り出した。すかさず反応して装甲を作り出した。

「隙を作れたとでも思ったか‥‥　！」

「あぁ、思ったさ！」

播磨の蹴り技が装甲を突破し、コスタの腹部を直撃した。

「‥‥　ぐはっ‥‥　！」

そうしてもう一度壁へと飛ばされて行った。

「‥‥　来たみたいね。」

耳元に自然と入ってくるいくつものバイクの音が神明を気付かさせた。それはまるで、狩りから帰って来た肉食動物の群れの用だった。彼らは次第にバイクを停め、ある建物へと向かい始めた。一瞬見てすぐに判断出来る不良の集団だ。

「あんた達・・・　早くお家に帰りなさい。」
「あぁ・・・　？てめぇ何様のつもりだよ。」
　集団の内の1人が神明の注意に荒く反応した。
「風紀委員よ。普段からろくな事してないあんた達を取り締まりに来たのよ。」
　すると、辺り一面から笑いが起きた。どうやら風紀委員を馬鹿にし、貶しているようだ。
「オイオイ！風紀委員だとよぉ！それも1人！何しに来たんだよ本当！」
「鬱にでもなったのかよ！」
「銀の腕章似合ってるねぇ・・・　！姉ちゃん！」
　流れは変わり神明は一気に煽られるようになってしまった。
「その割にはあんた達、隠し持っているそのナイフは何？もしかして警戒してる？」
　神明は不良集団の服装から何もかもをしっかり注意し観察していたのだ。
「ちっ、だからどうしたんだよ!?」
　1人が逆上して来た。

「あんた達は所詮そんな集団って言うことよ。あんた達がここを縄張りにして他の学区の生徒達を襲撃しているのも全て知っている。そんな屑みたいな生活は今日でもう終わりよ。」

神明は集団を睨み付けてこう告げた。

「さっきから図に乗りやがって・・・・殺してやらぁ！」

神明にある男がナイフを片手に襲い掛かった。「持ち方からして素人ね・・・・。」

あっさりかわしてそこから鞄を使い殴り倒した。

「なっ・・・・。」

周りからどよめきが少し起きた。

「くそっ、ならこれで・・・・！」

さっきと別の男が拳銃を取り出し神明に向けて発泡しようとした。だがしかし男の動きだけが止まったような感じだった。周りの集団には何が起きたのかさっぱり理解出来てない様子だった。止まった男に対して神明も銃を素早く取り出し手早く両脚に弾を命中させた。

「なっ・・・・！」

撃たれた男は苦しみながら倒れこんでしまった。

「こいつ、俺らと同じで実弾銃を・・・・？」

「しかもあいつ何か止まったよな・・・・？何が起きたんだよ・・・・！」

男らは突然の出来事に困惑を隠しきる事は出来なかった。

「レベル４の能力『時ずらし（タイムラグ）』よ。私の能力は特定の人物だけ僅かにだけど時間を止める事が出来る。」

「ちっ、こいつ能力者かよ・・・・！」

「あんた達がこう落ちぶれてる間にもこうして己の能力を磨いている人、能力を獲得しようと努力する人なんて沢山いるのよ。現実逃避は今日で終わりにしましょうか。」

神明は知っていた。エリートという立場を維持し続けて来た者、どん底から這い上がってきた者。だからこその発言だった。

「おめぇなぁ、無能力者を舐めるんじゃねぇぞ！」

集団が一斉に襲い掛かって来た。

「それは違う‥‥　！」
　男達の動きが一斉に止まった。連続した発砲音の直後に動き出した瞬間に彼らは一気に倒れ込んでいった。

「偏りきった自分達だけの価値観で全てを決めるのは屑がする事‥‥　！」
「ち、畜生‥‥　　。」
「急所は外してある。だから安心して。」
「‥‥　這い上がって来て。そして気付いて、自分の可能性に‥‥‥。」
　そう口にして神明は男達の元を去っていった。

「‥‥　来る！」
　土埃の間から動いている人影があるのに播磨は気付いた。コスタはまだまだ戦えるようだ。すると間もなくコスタが播磨の方へ飛んで来た。足元に糸のからくりを施して飛んでいるようだ。

「ふふふ、私がこれでくたばるとでも？」
「思わない方が後でがっかりしないし、その通りだな。」

「そうか・・・・。」
最後にこう小さく呟いた。

地面から僅かな音がした。
「・・・・ん？」
播磨は違和感を感じ、その直後地面から糸の束が来た。急な事で慌てて避けきった。だが糸の束がきりもなく、大量に地面から出てきた。そこから播磨を追い掛けて行った。だが持ち前の能力で来た弾き返しながらコスタの方へ空から近付いて行く。コスタへ近付くごとに当たる糸も尋常な数に増えていった。
「・・・・なっ！」
コスタへ攻撃を仕掛けようと播磨は突然糸の攻撃にかすってしまった。そして少しばかり体勢
を崩す事になった。
「貴様、やはりそうなのか・・・・！」

第７話　拮抗、決着

その時、播磨の演算処理によるバリアに隙が出来てしまったのだ。
「貴様、使い慣れていないだろう?自分の能力を。演算処理とやらの精度が悪いのじゃないのか?」
「くっそ、やっぱり抜けが出来る‥‥　!」
「後その能力自体のパフォーマンスが高い。やはりそれ相応の負担は掛かるのだろうな。」
コスタは見抜いていたのだ。播磨の能力から負担が大きい事、そこから出てくるであろう演算処理のミスを。
「貴様とは闘いの経験の差が違うのだよ‥‥　!」
更なる攻勢に打って出ようとした。播磨が己の能力を隠している事がこういう形で裏目に出てしまう事となってしまったのだ。
「させるか!」

頭の中が焦りで覆われるようになって来た。時間が限られている。播磨に余裕は何一つ存在していない。次なるコスタの攻勢を阻止しようと播磨は走り出した。

「これで‥‥　！」

走りながらテレポートし右足で円を描くようにコスタへ蹴りを入れようとした。

「2度目は無しだ‥‥。アルマトゥーア・ビアンカ！」

コスタの右手を一瞬で糸が包み込んでいった。そしてそこに播磨の蹴りが入った。

「ぐっ‥‥。」

蹴りの衝撃からか少し声を出し後ろへ一歩分下がったコスタだったが、前とは違い今回踏ん張り、耐えきって見せた。

「貴様、流石に痛かったぞ‥‥。」

「普通の奴なら重傷かそれ以上なんだが‥‥。お前もお前だよ。」

「だからこそだ‥‥。此処で確実に‥‥　殺す！」

「あぁ、俺もそうだ！」

そこから数分間2人の近接戦が続いた。だが2人共格闘技を繰り出すその間にもな

にかチャンスを作るきっかけを模索していたのだ。

「‥‥　！」

先に仕掛けたのはコスタの方だった。播磨の拳をしゃがんで避けた勢いのまま足元を蹟かせるように蹴った。

「なっ、しまった！」

ふわっとほんの一瞬宙に浮いた播磨。その隙に大技を叩き込んでみせた。両手を後ろへ持ってきて若干間を置きその両手を今度は前で１つに合わせる様に目線の先に勢い良く持ってきた。

「ブンドウク・セインズ！」

すぐ目の前にいた播磨を激しい閃光と明確な殺意を持った糸の束、塊が一瞬で襲った。播磨は

両手で上半身を覆おうとし少しでも防ぎきろうと反射的にそのような体勢を取った。だがあっという間に播磨を糸達が包み込んでいった。

「く、くっそぉ‥‥　！」

能力のバリアはかろうじて維持出来ているがどんどん後ろへと押されていった。そしてある拍子についに壁へ打ち付けられた。高鳴る金属音。放置物の山へと正確には放り込まれたようだった。

「はぁ・・・・ はぁ・・・・。ふぅ。随分私も年を取ったものだ。この現世でも『人間五十年』だとするならば、とっくに寿命を迎えているのか・・・・。」

さっきの大技で体力をそこそこ消耗した用だった。

「・・・・ く、くっそお・・・・。なんつー威力だ。後ろの壁にぽっかり穴が空いていやがる・・・・ !」

土埃に囲まれた中自分の光景に驚きながら痛みを少しでも抑えるためかゆっくりと立ち上がった。そして無造作な金属のがらくたの山のある物に目をつけた。

「これは・・・・。懐かしいじゃねえか。」

そしてそっとそれ、腰の長さくらいの鉄パイプに手を当て、ぎゅっと握りしめて自分の体へと持っていった。

「体力の負担的にもうそろそろ限界が来る・・・・。次の大技が来たら流石に防ぎきれな

い・・・・　！」

播磨の心を不安と焦りが貪っていく。だが

「だけどこれを使えば・・・・。でも久しぶりに使うからな。さっさと感覚を取り戻さないとな。」

そう呟いてからまだ周りを覆っている土埃を抜けてコスタの方へ走り出した。

そして直ぐに、『タッタッタッタッ・・・・　　』という足音がコスタの耳に入って来た。

「まだ来るのか・・・・。いい加減早くくたばらんのかねぇ・・・・！」

コスタの息が少し荒かった。それは疲れからなのだろうか、それとも苛立ちからなのだろうか。

それをよそに播磨は手ぶらでコスタへ向かった。そして目の前でテレポートした。

「又そのやり方か・・・・。しつこいぞ！」

コスタは振り返り播磨の攻撃に対応しようとしたが、また消えていた。

「ちょこまかと・・・・！」

消えてまた直ぐ表れた播磨を糸で襲おうと左手を向けたがまた消えた。そして何回かこのやり取りは続いた。

そしてとうとう播磨が蹴りを入れようとした。
「やっと攻撃する気になったか‥‥　！」
コスタの頭上に播磨は居た。彼には完全に蹴りを入れて来るかの様に見えた。だが斜め上を見ていた目の先に播磨の姿がない。
「な、しまった！」
コスタ本人も播磨も隙が出来た事に瞬時に気が付いた。

「俺はこっちだ！」
播磨が右手に持っている鉄パイプがコスタの右太ももを強打した。
「なっ！くっ‥‥　くそおぉ‥‥　！」
コスタは痛そうに眉間に皺を寄せていた。そして衝撃と脚の痛みでコスタは地面に倒れた。

「まだだ！」
播磨のその言葉にコスタは慌てて起き上がった。だが足元がふらついており、とても今までの能力の質を維持できそうに無かった。急な策としてコスタは糸で出来た弾を

右手から何発も出した。だが播磨はそれを特になにもせずに
弾き返した。

播磨が地面を足で強く叩いた。そして周りの床でヒビや亀裂、沈下が発生した。コスタはそれに煽られて体勢をまた崩しかけた。

「く、来るなら来い！フィーロ・ミューロ！」

コスタの周りに糸の壁が出来た。

「ならばこうだ‥‥！」

播磨は両手を横に持ってきて手首をくいっと曲げた。すると、両脇にあった廃材が播磨を方へ重力など関係なしに播磨の方へやって来た。

そして播磨は勢い良く右手を前にした。そしてその廃材がコスタの壁へ一直線に、かなりのスピードで向かった。

「此処で、今で、終わらせてやる‥‥！」

糸の壁に激しく物が打ち付けられていく。

「ぐ、ぐぬぬぬ‥‥。」

徐々に壁にヒビがミシミシなどと言った音を立てながら入っていった。

そしてついにそれは粉々の結晶となり破れ散った。コスタは驚く表情した後、悔しそうな目付きで播磨を見た。

「これで・・・・！」

壁の崩壊を確認し播磨が再び走り出した。

「来るなら来い・・・・！」

向かって来る播磨にこう叫んだ。

そして播磨は例の鉄パイプで攻撃をしようとした。

「・・・・二度と食らうものかぁ！」

コスタは糸の束で播磨の体勢を崩そうと攻撃を重ねた。だが攻撃の度に若干煽られるも体勢が崩れる事は無かった。

「そこだぁ！」

コスタ本人ですらあまり自覚の無かった上半身、肋骨の方へ　鉄パイプを思い切り向けた。

コスタは心臓付近で両手を交差さて守備の体勢に入り、播磨の攻撃を防ごうとした。

閃光が激しく飛び交っている。播磨の攻撃とコスタの蜘蛛の巣防御。それぞれが『矛と盾』として対立しあった。

「な、なんて堅さだ・・・・　！」

「当然・・・・　！私が貴様から見て老耄だとしてもそんな事は関係ない。勝ち、貴様を殺すのだ！」

コスタがそう告げると防御がより一層堅くなった。播磨はそれの反動で体を後ろへ若干剃らされてしまった。

「だけど、それは俺も同じだ！ここで勝たなくてはいけないんだ！」

心が折れそうになった播磨が自分にこう言い聞かせた。

「・・・・　俺は守らなくちゃいけないんだ・・・・　！この学園都市を・・・・　！」

播磨が再び押し戻した。

「この先天国が待っていようが、地獄が待っていようが・・・・　守ってみせようじゃねぇか！」

播磨の目の色が明らかにさっきと違った。本気の目をしており、情熱に満ちていた。

「な、何!?」

播磨が押し戻すどころか次第に優位になっていった。

「うぅおぉぉぉ!」

そしてついに、播磨がコスタの守りを押しきった。鉄パイプがコスタの肋骨、心臓付近に凄まじい勢いで当たった。

「そ、そんなぁ‥‥ !」

「ぐはっ‥‥。」

コスタが目を閉じて苦し紛れに血を吐いた。そして勢い良く飛ばされ、地面に一度叩きつけられてから壁を破り、外の錆びきったコンテナ置き場に放り込まれた。

第８話　　気付き

「・・・・　ふぅ・・・・　　。」

そう息を吐き出し播磨が顔に少しついた血を手で拭った。そして静かに歩き出す。

「あまりもうこういう事はしたく無かったんだけどな・・・・。」

少し悲しそうな目付きをし独り言を淡々と言った。

「コスタ、あんたには悪いけどもう終わりだ。あんな衝撃波を間近で受けて大動脈やら心臓やらが無事な奴なんてほとんど居ねえよ・・・・。」

コスタの元へ着くと、播磨は膝を曲げて左手を置いて地面に座った。

「な、何故謝るんだ・・・・。貴様はただ敵を仕留めた。それだけの筈なのに・・・・。」

コスタはさっきまでのとは大違いのかすかすな声でこう返した。

「よほどのやべー以外奴は人殺しをしたくてする訳じゃねえだろ。俺だってもう人殺しなんてしたく無かった。でもそんな綺麗事で済む甘い世の中なんかじゃなかった・・・・。」

播磨は優しく語りかけている。心の底の優しさ彼をそうさせたのだろうか。

「私も‥‥　もしかすると貴様と同じだったのかも知れない‥‥。まぁ、それは罪を何処かに投げ捨てただけの話なのだがな‥‥。」

コスタの目がどんどん細くなっていく。声もそれに合わせるかの様に小さく、弱々しくなっていった。

「時期があれだけど気付けたことは幸せなんじゃないか‥‥？それに対して本当に不幸な奴は『何か』に気付かない、気付けないまま死んでいく‥‥。」

「そうか‥‥　ならば‥‥　良かった‥‥　。死ぬ前に‥‥　貴様に会えて良かった‥‥　。感謝したい‥‥。」

「あぁ。またいつか『地獄』で会おう‥‥。」

このやり取りを最期に、コスタは息を静かに引き取った。心無しか吹っ切れた顔をしていた。

「‥‥　さてと。」

播磨はコスタの元からゆっくり立ち上がった。

「俺も何か見直せた物があるかもしれない。ありがとう。」
死んだコスタの近くでこう呟いた。播磨の顔に若干の笑顔があった。

「随分手こずっていたわね……。」
播磨の元に神明がやって来た。
「あぁ。確かに結構体とか痛い。特に頭……。」
播磨は此処で頭を抑える仕草をした。

「いつもこう先頭に立ってくれて……　何か申し訳ない感じね。」
「良いんだよ。俺はやりたいからやってるだけだし。それにコスタのお陰で気付けた事があるかもしれない。」
「そう……。それなら何より。」

「後、もう１つ伝えないといけないことがあるんだ。」
播磨の表情が変わった。
「コスタもそうなんだけど、これから魔術師って言う連中が学園都市に多分やって来て、科学とかが気に食わないとかで襲撃なり何なりしてくると思うんだ。」

「そうね‥‥　だとするならば色々と心配な所が多いかも。」
「そうなんだよな‥‥。あんな奴らがゴロゴロ来て全て対処出来る訳ないし‥‥。」

播磨が腕を組んで少し考え込んだ。
「こんな事言うのもあれだけど、今の痛みだらけのあんたが考えてもあまり実にならないんじゃない？そこまで焦らなくても答えは導けるわよ、きっと。」
熟考していた播磨に神明がこう優しめに指摘をした。
「‥‥　それもそうだな‥‥　。」

「それより今はこの人をどうするか考えましょう。」
神明がパッと振り返りこう言った。それに合わせて播磨も振り返った。
「コスタ‥‥。故郷に帰らせられなくて申し訳無いな‥‥　。でもせめて同じ地球の土に還してやらないとな。」
播磨が能力を使い地面に人がすっぽり入るくらいの穴を作った。そこにそっとコスタを入れた。

「さて後は埋めるだけ‥‥　ん？」

播磨が何かに気付いた様だ。
「どうかしたの？」
「いや、これ・・・・。」
播磨は神明にコスタの服の中にあった写真を見せた。恐らく１０数年前にコスタが家族と撮った写真だろう。本人と妻、子供が２人写っていた。２人ともまだ幼そうに見えた。

「そうか、そうだよな・・・・。お前にもやっぱりあるじゃないか・・・・。」
その写真とコスタを交互に悲しそうに播磨が見た。神明も切なそうにそれらを見つめた。

「よし。」
開いた穴を２人がかりでそっと手をを使い埋め切った。
「どうかもう１回いつか家族に会ってくれよな・・・　。」
地面にそっと手を置き播磨がこう呟いた。
「・・・　そろそろ行きましょうか。」
「あぁ、そうだな。」

２人はその場を後にして歩き始めた。

「それにしても此処は前から何も変わっていないんだな。まるで過去にワープしたみたいに。」

並んで歩いている神明にこう話し掛けてた。

「そんなの当然よ‥‥。って言いたいけどそれでもびっくりするくらい何も変わっていないわね。強いて言うなら廃墟の劣化くらいかしら‥‥。」

播磨に同情する形で神明がこう返した。

「第０特区‥‥。学園都市の負の遺産見たいな物なのかな‥‥。だけど俺は此処に世話になったし、愛着も有るには有るかな。」

第０特区はかつて都市の上層部が第１学区のすぐ隣に設けられ、彼らは其処に都市のあらゆる中枢機関、上層部のためのカジノなどと言った娯楽施設などを設置しようとした大胆な開発計画のために命名された。

だが推進派のトップの汚職が判明すると雲行きが怪しくなる。そして上層部の権力

闘争の末にこの計画は完全に破綻。その結果、今の廃墟街、不良の溜り場が出来てしまった。今では第1学区の再開発などで多少は誤魔化しているようだが、誤魔化し切れる訳が無かった。

　その廃墟の集まりを背に播磨がぐっと歩きながら手を大きく空へ伸ばした。
「ところで、こんな遅くまで悪かったな。神明が居なかったらあの能力使えなかったからな。」
「だって補佐官だもの・・・　。そんな役職が指示待ち人間でどうするのよ・・・　。」
「そいつはありがたいなぁ。」
　播磨が神明に向けて微笑みこう返した。

　しばらくすると2人は帝ヶ崎高校の寮に到着した。寮といってももはやただのマンション群なのだが。
「じゃあ俺A方面だからさ。ここでお別れだな。」
「私はC方面ね。それじゃあ今日1日お疲れ様。」
「それはお互い様だな・・・・。」
　このやり取りを最後に2人はそれぞれ反対の方向へ歩いて行った。黒に近い蒼色の

空に星が一つ一つ懸命に輝き続けている。

播磨は暗証番号を慣れた手付きで入力し、ドアをさぁっと空けた。そしてそのままの勢いで別の部屋にあるベッドに吸い込まれるように倒れ込んだ。まるで今までの疲れが爆発した様だった。

「ふぅ‥‥。頭痛いな‥‥　。明日学校なのに大丈夫かなこれ‥‥。」

播磨は独り言をぶつぶつ言い続ける。

「そういえば昼のあのアニメ見逃たな‥‥。録画しようにも容量が一杯だしなぁ。」

普段なら発狂しているであろう播磨だが、疲れからかそんな反応をしている気力も無くただただ落胆するのみだった。

「飯‥‥　。もうどうでもいいや‥‥。」

そして倒れ込んだそのままの勢いで電気を付けたまま寝入ろうとしていた。

「教材入れるの朝でいいや‥‥　もう知らないや。」

眠気によって考えが滅茶苦茶になってしまっていた。

そして布団にしがみつくようにして目をそっと閉じた。時計の針が１２と１を指していた。

「‥‥　俺ってあの頃から何か変われたのかな。」

そう口にして深い眠りへと入って行った。

第9話　日常と水面下

「おいおい、嘘だろ!?」
男がとある部屋の中で驚きながら叫んだ。その部屋は教会の様な豪華な西洋建築の一室であった。
「急にどうしたんだよ一体・・・・。」
また別の男が言葉に反応したかのように、その部屋に入って来て眠そうにこう返事をした。
「いやよ、約束の時間からも3時間経ってるのにコスタさんと連絡が全く取れねぇんだよ!」
男は驚きと焦りを隠せない状態であった。
「いや待てエルチュアーネ、きっと回線か何かの問題じゃないのか？コスタさんがそんな事するはずないだろう？」
エルチュアーネという男に対しもうひとり1人の方はやけに冷静だった。

「それなら・・・・　！もう試した・・・・　！だが特に問題は無かった・・・・　！」
　エルチュアーネは悔しがりながら握り拳で近くにあった机をドンと叩いた。
「そ、そんな・・・・。あの人が・・・・冗談だろ・・・・　？」
　もう１人の男もさっきの眠気が飛んでしまい、驚きが隠せなくなっていた。
「いくら年の衰えがあるとは言えあのコスタさんがだぞ!?一体何者なんだよ！教えてくれよディゼット！」
　エルチュアーネはディゼットというもう１人の男をじっと見ながらこう言った。
「確かあの人、日本のどこかに殺しの依頼に行ったはず・・・・。ターゲットに逆に殺られたって言うのが一番怪しいな・・・・。」
「そんな・・・・　！あのコスタさんがターゲットに殺られたなんて・・・・　！許せねぇ！今から向かってやる！」
　悲しみと怒りを露わにしたエルチュアーネが座っていた席を立ちどこかへと行こうとした。
「おい落ち着け！何も情報無しに行ったら、俺達も殺られてしまうぞ！」

ディゼットはそんなエルチュアーネに手で止めながらこう返した。

「俺だって辛いさ・・・・！だがコスタさんを倒したって言う事は相当の強者の筈だ。下手すれば俺達で行っても全員殺られる・・・・！」

「それもそうだが・・・・　！」

「お前だけが悲しくて、辛いって言う訳じゃないんだぞ・・・・！ここは堪えてくれ・・・・。」

そうディゼットが言うとエルチュアーネは少し黙り込んだ。

「・・・・そうだよな・・・・　。」

そこからやっと彼は涙目になりながらも落ち着きを取り戻したのであった。

「とりあえずこの事は今パリにいるあいつにだけ話そうと思っている。他の奴らには絶対言わない。

「色々分かり次第、俺達3人で日本へ向かうんだな？」

「あぁ、そうするつもりだ。他の奴らはほとんど置いていこう。」

「よし、分かった。それで行こう。」

2人の会話が少し途絶えると2人共立ちあがり互いの目を見つめあった。

「フォレスタ、絶対仇を取りに行くぞ‥‥　！コスタさんの為にも‥‥　！」
「そんなの当然だ‥‥　！」
「「我が『ナポリ幻枢機団』の名に懸けて！」」
２人の言葉が見事に揃った。それは思いの一致を捉えられるのだろう。

朝日が部屋を窓越しで照り付けている。外から鳥などの鳴き声も聞こえて来る。
「‥‥‥‥　ん‥‥　んん‥‥。」
そして播磨もとうとう深い眠りから目を覚まそうとしていたのであった。

寝起き特有のだらしない目付きをしながらそっと播磨はベッドからゆっくりと磁石を引き離すように動き出した。
「８時２５分‥‥。ちょっと急がないとな‥‥。」
播磨の通う帝ヶ崎高校は９時から１限目が始まる。播磨の寮から高校２年生の使用する『二棟』まではだいたい徒歩、登山１０分くらいだ。そしてすぐ近くには帝ヶ崎中学校があり、生徒数も中高合わせておよそ１８００人くらいと案外大規模な学校である。土地も小さな山１つ全て持っているのではないかというくらいの大きさだ。

前日の空腹が播磨の予想以上に響いていたので、しっかりと朝ごはんとしてパンをいくつか食べる事にした様だ。

そしていくつかそれらを貪った後、熟練の技であっという間に学校へ行く準備を整えてみせた。時間は８時４０分だった。扉を開けて施錠をし、エレベーターで1階まで降りてから、登校の始まりだ。

学校へ続く坂道には様々な歩調の多くの生徒がいた。それを気にせず播磨はゆっくり坂道を上がって行った。すると背後から肩をトンっと叩かれそちらへと振り返った。

「よぉハリマー。久しぶりやね～。今日は早いんやね。」

ある学生が強く訛った発音、明るく軽い口調で播磨に話し掛けた。

「よう。久しぶりって程でも無いけどな・・・・。」

播磨は少々苦笑いしながら返事をした。そして2人は横並びになった。

「そういえば、この前の校内模試どうやったん？」

「あれかー・・・・。あんま良くなかったからなぁ。」
「そんな事言っときながら学年トップ１０は確定でしょ?」
「それはそうだったけどな・・・・。てかお前も俺と似たようなもんじゃん。」
「それもそうやな～。でも来月の中間テストは負けへんよ。八尾ｖｓ播磨や!」
「おう、乗ったぜその勝負。」

２人の日常的な会話の中で播磨は太陽が出ているものの雲が多く包み込んでいる空を反映しているかのような複雑な気分であった。昨日の事でまだ心の中で思う事があるのだろうか。

そんな会話が続いているといつの間にか校舎にたどり着いた様だった。
「今の時間は・・・・　８時５３分か!ちょっとヤバかったかもな・・・・　!」
「後６分以上も逢ったのか。全然余裕でしょー。」
「流石駆け込み登校のプロ!言う事が違うなぁ～。」
八尾は身振りなどを使って播磨の発言に感心を示した。

「こっちだってなぁ・・・・。好きにあんな事してるじゃないんだよ・・・・　!」

播磨が若干悔しそうに八尾に対して反論した。
「いやいや、じゃあ早起きを頑張ればそうはならんよ。明日から頑張ってくれよハリマー。」
「それが出来ないからこうなっているだよなぁ・・・・。」
こう播磨が言った後、少々落ち込んでしまった。

「まあハリマー。段々直してけばええでしょ・・・・。」
播磨の態度を見た八尾が励ましの態勢に入った。
「残念ながら、もう既に俺の体は腐った生活習慣が身に付きつつあるみたいだな・・・・。ステージなんとかとか、そんなレベルじゃねぇ。」
「おいおいそれ、卒業して大学行ったらどうすんねん。単位落とすとかあんまり笑える事じゃ無いやろうにー・・・・。」
移動教室である事に気付いた2人は、ロッカーから個々の教材を取り出しそこを目指して歩いた。

「てかお前理科基礎選択何だっけ?」
「俺は化学と物理にしたけど、お前はどうなんだよ?」

「僕は物理と生物やな。にしてもこの学校は色々便利やね～。選択授業の選択の幅が広すぎるにも程があるで。」
「それは俺も思った。何から何までエグいからな・・・・。」
２人はどうやらこの学校に大変満足しているようだった。

「よし、化学講義室は3階やからここでお別れやな。じゃあまた次の数学Ⅱの授業でな！」
「おう。また分からんからってふて寝するなよ。」
「それは余計なお世話やで・・・・！」
八尾はそう言い階段を小走りで上がっていった。

帝ヶ崎は他の学園都市の学校から見ても、勿論学園都市以外の学校から見ても多少特殊な学校なんだそうだ。私立なのでかは知らないが、先生を多く雇っているので生徒が自由にどの科目を習うか選べる。選択ルートは他の学校を圧倒しているのかもしれない。というかそうだろう。能力開発も勿論行われているが生徒の目は在学の内に進学を見つめるようになるようだ。

他にも山から第1学区を一望出来る食堂など素晴らしい設備が沢山ある。だが案の定学費はお高いが成績が良ければ給付型の奨学金もあり援助もかなり手厚い。こういった援助については国が絡んで来るそうで何でも日本随一の進学校の1つだからだそうだ。そんな学校を築き上げた先輩方は敬意を表したい。

播磨は物理講義室のドアを開けそして静かに中へと入っていった。

ーーーー俺はこの学校に入れて良かったと思っている。ただ1つを除いて……。ーーーー

第１０話　常識が当然とは限らない

「あ、播磨くん、おはよう。」
何処に座ろうかと少し悩んでいた播磨に優しい声でこう話しかけて来た。
「おお、相良（さがら）。おはようやな。」
播磨は振り返ってあいさつを返した。
「良かったらここどう？」
隣の席を指差しながら播磨を隣に座るように誘った。
「じゃあ遠慮なく座らせてもらうか～。」
そうして播磨はよっこらせと席に着き、授業のチャイムが鳴るまでの間、休日の間にあった事やテストの事など他愛も無いことを話していた。
そしてそうこうしているといよいよ1限目の開始を知らせるチャイムが鳴り響いた。
「よし、始めようか。て、あー号令だな。とりあえず播磨頼むよ。」
隣の準備室から出てきた若いめの先生らしき人物がこう話した。

「あ、起立。気を付け、礼。」

播磨は慣れた口調で授業開始の号令を言った。そしてそれが終わると生徒は着席していった。こうして授業が始まったのである。

授業は少人数で行われている事以外は特に変わりは無い。普通にさっーと進んでいった。授業に関してはそこまで他の学校と違う物をしていないようだ。勿論能力開発のカリキュラムについては例外である。

帝ヶ崎が文系への進路に比較的特化しているのは、学校性も去ることながら、学園都市の行政機関などが集中している第1学区にあるのも多少は影響しているのであろう。

第1学区は住み心地があまり良くないらしい、というか実際あまり住みやすくはないかもしれないが、帝ヶ崎の場合は中心地から少し離れた山に校舎、グラウンド、寮、更にはちょっとした学生向けの商店街が集中しているのでそこに関しては不満はあまり出ていないし、播磨達にも無かった。

そして時は過ぎ、最後の授業が終わり下校時のホームルームを迎えようとしていた。
「おいおいハリマー。お前週末課題ちゃんと出したか？」
八尾が播磨に対してちょっかいを掛けるようにして話し掛けた。
「当然だろ？能力禁止でグラウンド１０周走らされて反省しないドＭさんなんてほとんどいねーよ。」
「あれは自業自得やろ。まさか怒りのあまりに宿題を全て燃やす暴挙に出るなんて、お前は革命家か何かかいな？」
「あの時はなぁ・・・・。ちょっとグレてたというかなんというかなぁ・・・・。」
播磨が頭を抱え込んだ。それに対して八尾はハハハと笑った。
「おーい播磨。ちょっと来てくれ。」
チャイムが鳴る前にホームルーム教室に入って来た担任が播磨を呼んだ。
「は、はい。」
それに反応し八尾との会話の途中ながら小走りで担任の方へ向かった。
「ちょっと放課後に生徒指導室に来てくれないか？何の様かはお前なら分かるだろうけど。」

担任の元へ着いた播磨にこう伝えた。すると何かを察したかのような顔をして、
「またあれですか・・・・。」
と少し呆れ気味になりながら返した。

放課後の掃除を終えて播磨が向かったのが管理棟の3階にある、生徒指導室だった。そこへ入るドアをノックをし、ドアノブの握りくっと回して入った先には、他の校舎、部屋とは雰囲気が完全に異なる和の空間が広がっているのだ。

生徒指導室に入ってからは木で出来た廊下があり、順に受付所、面談室が複数、準備室、そして生徒裁判所という初めて聞くと若干引くであろう部屋がある。播磨の用事があるのは一番奥にある生徒裁判所である。

本格的な和風な内装で構成されている生徒指導室の中でも特に大きくかつ豪華な内装をしているのが印象的で、視界のあちらこちらにある金箔や大きな松の絵が目に入り込んでくる。そして大広間のような構造の生徒裁判所にずらっと
座布団と正座した際に使う簡易的な机が用意されてあった。

「播磨か。またすまんなまたわざわざ。だがどうしても手続きとかに風紀委員のトップのお前が必要なんだ。」

播磨が来ている事に気付いたある大男が話し掛けた。彼は生徒指導の主任だ。

「いやそれは仕方ないことですし・・・。何とも言いようがないんですけどね。」

播磨は少し弱気になって返した。どうやらこの謎のシステムに反論すると厄介事になるのはとうの前に察しているようだった。

「そうか。後５分で始まるからそろそろ席に着いて欲しい。」

「了解しました。」

この会話を最後に２人ともそれぞれの行くべき場所へ戻っていった。

配布されている資料を見ると今回の被告は『寮内での過剰な能力使用とそれに伴う器物破損』という容疑らしい。普通の学校なら生徒指導による厳重注意とか謹慎とかで済む筈なのだが、この学校は戦前の大日本帝国の流れを未だに汲んでおり、更にそれらを独自で変え、この現状にたどり着いたようだ。

それは制服にも現れている。学生服の上に勲章の様な物がついている人がいる。まるで軍隊の将軍のようだ。勲章という名の通り何か重要な立場についたり、学校指定の功績があると授与される。播磨の場合は４つある。

はっきり言ってしまうと帝ヶ崎は右寄りの学校だ、それもかなりのである。だが生徒には不満は特にないようだ。やはり設備の充実さが物を言うそうだ。

そしていよいよ裁判という名の茶番劇ほどではないがショーが始まったのである。

「よし、被告をこちらへ連れて来い。」

と、生徒指導代表がある生徒に伝えた。

「かしこまりました！」

するとその生徒がはきはきとした声で返事をし、小走りで待機室にいる被告を連れ出しに行った。

「あれも生指寮の被害者だな‥‥。」

播磨がきびきびとした生徒の動きを見て確信しながら小さな声で呟いた。

「生指寮の恐ろしさ、良く理解しているようだな‥‥。やはり役職が役職なのか。」

播磨の呟きに隣席のある生徒が反応した。
「そんなあんたはどんな役職で？生徒会関係か？」
播磨が顔の向きを変えて直感的に質問をした。
「あぁそうだったな。これでもだいぶ前から生徒裁判官になものでな。ここに来ている訳だ。」
「あんたも被害者の１人という訳か……。」
播磨は呆れ気味に同情をした。
「にしても生指寮には脱帽するよ。あそこは人間改造所みたいなもんだからな……。拘置所の独房を若干改良したみたいな場所で自衛隊みたいに毎朝起床ラッパで起こされ、そこから１日全て生指の言いなりとはな……。そらやらかす奴も年々減るわな。」
「その目、恐れているな。何か心当たりでもあるのか？」
「無いけどいつかやらかしてしまいそうなんだよな。これでも昔は結構あれだったからな…。」
ーーーーそう、昔の話だ。今はただ真っ直ぐ道を進むだけだ。だから、だか

ら・・・・。ーーーー

「おいどうした?」
はっと気が付いたような感覚がした。
「不思議だな。会話中なのに急にぼおっとするなんてな。」
「あぁ、すまんすまん。たまにあるんだよなぁ・・・・。」
播磨はその場しのぎの会釈で対応した。

結局、被告人は反省の意が良く確認できるという理由で刑は修理代分の罰金と、４日間の自寮内謹慎で済んだ。播磨としては、風紀委員に特に影響が無く安心だった。生指寮に入った者は半強制的にしばらく風紀委員に入らさせられ、
そのための手続きが面倒だからだ。

「そういやお前名前なんて言うんだ?聞いてなかったな。俺のはもう分かるだろ。」
裁判を終えて生徒指導室を出、階段を降りている途中に唐突に話し掛けた。
「そういえばまだ言っていなかったな。外京。外京　直仁（げきょう　なおひと）だ。」
「分かった。じゃあまた会う機会があったらって、どうせまたあそこで会うけどな。」

「それもそうだな。」

２人はこの会話を最後に別れた。

「よし、向かうか～。」

播磨は軽い足取りで第1支部の方へ向かっていった。